

郷土史への扉



年の歳月を要したことが分かります。

を考慮すると非常に経済的な工法であったことが分かります。

薩摩藩の土木技術

これまで、天降川川筋直しと宮内原用水路について紹介しました。今回は、

これらの治水工事がその後、当地域や薩摩藩にどのような影響をもたらしたのかについて紹介します。

川筋直し後の国分平野

天降川の川筋直しの完成は、国分平野にどのような変化をもたらしたのでしょうか。

①河川の氾濫がなくなった。

②新たに約四〇〇haの水田ができた。

③麓（國分中央）、府中、広瀬などとの行き来が容易となつた。

④城下町の拡大が可能となつた。

このように、国分地域は、地形の変化に伴い水害のない安心で安全なまちへと大きく変わり、新田による農業の振興、城下町や道路などの整備に伴う流通経済の向上などにより、それまで以上に発展していきました。

水田が完成するには「享保元（一七一六年、国分の国分郷新田完成」の記録によると、約四〇〇haの河床の整地や道路、用排水路の整備などに、約五十

で畠地でしか利用できなかつた約四三六haの耕作地が水田に変わり、地域の人々を大いに潤しました。

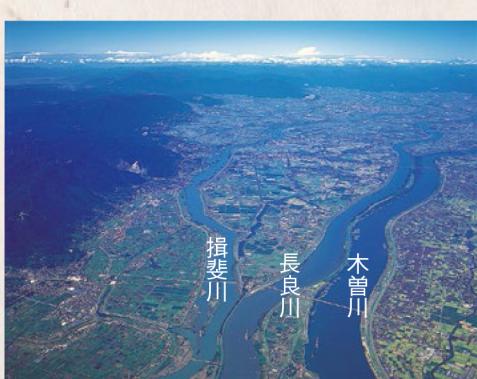
この工事で注目されるのは、土木技術の高さです。宮内原用水の主要部分の勾配は千メートル分の五十分、つまり二一‰で一メートル下がるという極めて平坦な勾配

宮内原用水 完成三〇〇年 その③

治水工事がもたらしたもの

た土木技術は、その後、宝暦五（一七五五年）年の岐阜県の木曽三川治水工事の大部が溶結凝灰岩であり、これを穿つて水路を造ることを考え合わせると、当時の測量技術の正確さと土木技術の高さに驚かされます。

木曽三川とは、岐阜県南西部から愛知県北西部にかけて広がる濃尾平野を流れる木曽川・揖斐川・長良川のことです。当地域はこの河川の氾濫よつて毎年のように水害が発生していました。薩摩藩はこの木曽三川の治水工事を出し巨額の資金を費やして完成しま



木曽三川の川筋（提供：海津市）

した。手伝い普請は、幕府が各藩の経済力を削ぐ政策とされていますが、果たしてそれだけの理由で薩摩藩に命令したのでしょうか。

木曽三川治水工事は、天降川川筋直しから八十八年、宮内原用水完成から三十八年が経過して行われました。工事で用いた土木技術は、江戸幕府役人が指示した工法もあるでしょうが、薩摩藩内で培った技術が基礎となり、大いに役立つたのではないでしょうか。

今年は、天降川川筋直し三五〇年、宮内原用水完成三〇〇年の節目の年に当たります。この二つの大事業の背景にある治水・防災・灌漑、土木技術などについて、あらためて顕彰すること

で、当時の人々の思いを考えるよい機会になるのではないかでしょうか。

（文責：鈴木 隆）